

故木村九藏

蠶業ニ関スル事蹟

高山九藏弘化二年十月十日群馬縣緑野郡高山村ニ生  
ル父ヲ寅藏ト云フ九藏ハ其五男タリ寅藏晩年家政ヲ  
次男長五郎ニ譲リ安政五年多野郡日野村ニ退隠スル  
ニ際シ九藏(時ニ年甫メテ十三歳)兄ノ意ヲ受ケテ父ノ膝  
下ニ侍リ朝夕炊爨ノ勞ヲ執リ孝養至ラサル所ナシ此  
歳穀雨ノ候ニ際シ村人ノ養蠶準備ニ熱中セルヲ見テ  
之ヲ羨ミ懇望措リ能ハス至情屢々言外ニ溢ル隣人之  
ヲ奇トシ蠶蛾ノ尿紙ニ卵粒ノ附着セルモノ數葉ヲ與  
フ九藏大ニ喜ビ携ヘ歸テ父ニ請ヒ居宅ノ樓上ニ於テ  
孵化セシメ之レカ飼育ニ努ム家屋素ヨリ隱宅ナレハ

埼玉縣

構造甚々廣カラス加旃蠶具ノ如キハ一トシテ備ルナ  
ク自ラ其机ヲ以テ組ニ代ヘ小刀ヲ以テ庖刀ニ當テ蠶  
箔ノ如キハ僅カニ麦篩ノ類ヲ集メテ之ヲ用ユルニ過  
キス室内ニ一爐アリ竈ヲ兼ヌ父寅藏常ニ爐ニ倚リ終  
日楮火ノ絶ユル事ナレコノ故ニ暖煙自ラ室内ニ満チ  
樓上亦頗ル快温ヲ覺ユ從テ飼育スル處ノ蠶兒甚々強  
健ニレテ發育亦神速ナリ九藏心中快樂ニ絶エヌ其薪  
水ノ務ヲ執ルノ外更ニ他事ヲ顧スレテ日夜意ヲ蠶兒  
ノ拳勗ニ注キ身ヲ飼育ノ勞ニ委不須臾モ蠶架ノ傍ヲ  
離レズ性々衣帶ヲ解カス寢食ヲ忘ルニ至レリ觀ル  
モノ其ノ熱心精勵壯者モ及ハサルヲ賞揚ス而シテ飼  
育其ノ歩ヲ進メ先熟ニ及ヒ後簇ヲ解クニ當リテヤ其  
成繭優美ニシテ收穫ノ割合ニ夥多ナリレコト遠ク

木村九藏



蠶業ニ関スル事蹟

故木村九藏

九藏弘化二年十月十日群馬縣緑野郡高山村ニ生  
ラ寅藏ト云フ九藏ハ其五男タリ寅藏晩年家政ヲ  
長五郎ニ譲リ安政五年多野郡日野村ニ退隱スル  
レ九藏(時ニ年甫メテ十三歳)兄ノ意ヲ受ケテ父ノ膝  
侍リ朝夕炊爨ノ勞ヲ執リ孝養至ラサル所ナシ此  
雨ノ候ニ際シ村人ノ養蠶準備ニ熱中セルヲ見テ  
羨ミ懇望措ク能ハス至情屢々言外ニ溢ル隣人之  
トシ蠶蛾ノ尿紙ニ卵粒ノ附着セルモノ敷葉ヲ與  
藏大ニ喜ヒ携ヘ歸テ父ニ請ヒ居宅ノ樓上ニ於テ  
セシメ之レカ飼育ニ努ム家屋素ヨリ隱宅ナレハ

埼玉縣

甚タ廣カラス加旃蠶具ノ如キハ一トシテ備ルナ  
ラ其机ヲ以テ組ニ代ヘ小刀ヲ以テ庖刀ニ當テ蠶  
如キハ僅カニ麦篩ノ類ヲ集メテ之ヲ用ユルニ過  
室内ニ一爐アリ竈ヲ兼ヌ父寅藏常ニ爐ニ倚リ終  
火ノ絶ユル事ナレコノ故ニ暖煙自ラ室内ニ滿チ  
亦頗ル快温ヲ覺ユ後テ飼育スル處ノ蠶兒甚タ強  
シテ發育亦神速ナリ九藏心中快樂ニ絶エヌ其薪  
務ヲ執ルノ外更ニ他事ヲ顧スレテ日夜意ヲ蠶兒  
動ニ注キ身ヲ飼育ノ勞ニ委不須臾モ蠶架ノ傍ヲ  
ス往ヒ衣帶ヲ解カス寢食ヲ忘ルニ至レリ觀ル  
其ノ熱心精勵壯者モ及ハサルヲ賞揚ス而シテ飼  
歩ヲ進メ先熟ニ及ヒ後簇ヲ解クニ當リテヤ其  
爾優美ニシテ收穫ノ割合ニ夥多ナリシコト遠ク

埼玉縣  
木村九藏



尋常品ノ上ニ出テタルニ父寅藏ヲ始メ近隣ノ之ヲ見  
ルモノ孰レモ驚嘆セザルハナシ時ニ家兄長五郎又之  
ヲ目撃シテ欣喜禁スル能ハス十三歳、童子ニシテ能  
ク此働ヲナセリ之ヲ用ヒテ相共ニ事ヲ爲スニ如クス  
ト乃々其翌年ニ至リ長五郎ハ九藏ヲ自家ニ迎ヘ協力  
シテ業ヲ執ルコト、ナセリ

嘉永五年長五郎、家ニ至リ相俱ニ一意養蠶ニ勉メタ  
リシニ不幸蠶兒ハ中途ニシテ白彊病、冒ス所トナリ  
悉リ斃死ス越シテ又一年前年、如シ九藏熟ク謂ク  
吾曩ニ隱宅ニ於テ善美、繭ヲ收メタルハ真ニ僥倖ニ  
出シモ、ニシテ決シテ技術、然ラシメタルニアラス  
ニケ年兄ト俱ニ後事シタル飼育ノ方法ハ隱宅ニ於テ  
爲シタルト異ナリタル所ナシ然ルニ前者ハ優ニシテ

埼玉縣

後者ハ甚々方レリ依之觀之ハ養蠶豊凶、岐ル、所ハ  
必スヤ他ニ原因ナカルヘカラスト即チ想ヲ飼育上ノ  
適否ニ及シ之ヲ實地ニ鑑ミ始メテ稍覺ル所アリ彼ハ  
家屋狹隘ナルモ日夜爐火絶ユルコトナク且其樓上飼  
明ニシテ快温場内ヲ繞リ迄テ蠶兒、教育ニ適シタル  
モ此レハ村内唯一ノ大履ナレハ屋内各室陰冷鬱翳ニ  
シテ明晰ナラス且大氣ノ不流通ナルニ因ルナラント  
依テ之ヲ兄長五郎ニ質ス長五郎膝ヲ打チ喜ンテ曰ク  
吾考フル所モ亦然リト茲ニ於テ斷然家屋ヲ修繕シテ  
育場頓ニ其面目ヲ改ム即チ蠶期ニ入ルヤ之ヲ實際ニ  
試シ兄弟互ニ飼育場ニ奮勵スルコ前數年ニ倍シ特ニ  
従来ノ經驗ニ徴シテ具サニ取捨ヲ行ヒ且火力ヲ藉リ  
テ補温防濕ニ備ヘ百方心身ヲ勞シ蠶兒ヲ觀ルコト宛



モ慈母ノ赤子ニ於ケルカ如シ果タセハ其ノ終ヲ告  
 ヲルニ當リテヤ白癩病ハ全然其ノ痕ヲ絶テ成爾稍見  
 ルハキモノアリ然レトモ未タ以テ善美ノ域ニ至ラス  
 之ニ依リ互ニ相謀テ曰ク蠶室ノ適否ハ素ヨリ蠶兒ノ  
 豊凶ニ関スルコト大ナルヘシト雖モ尚他ニ則ルハキ  
 養蠶原理ノ存スルアリテ之ヲ知ルニアラスハ萬全  
 ノ豊作ハ望ムヘキニアラスト茲ニ於テ向後専心其ノ  
 原理ヲ討究スヘキヲ誓ヘリ此レ實ニ文久元年ニシテ  
 他日蠶室ノ方向整温ノ目的炭火ノ利用等ヲ唱導シ自  
 ラ得ル所ノ技術ニ依リ飼育ノ改良ヲ擴張シ其養法ノ  
 四方ニ普及スルニ至ル端緒ナリ顧フニ當時兄弟ノ苦  
 心慘憺タリシ経歴ハ後ニ長五郎ノ高山社ヲ組織シテ  
 美名ヲ海内ニ轟カシ九藏ノ競進社ヲ創立シテ育法ノ

埼玉縣

蘊奥ヲ究メ蠶界ノ惰眠ヲ警醒シ斯業ノ先覺者トシテ  
 仰慕セラルルニ至リシ素因ニシテ蓋シ此事業ハ頑童  
 ノ時代ニ胚胎セシモノナルヲ知ルニ足ル

一 一派温暖育法發明

以上、如ク長五郎トカヲ併セ共同試育ヲシタルを自  
 己ノ所見ト長五郎ノ信賴トニ反シタル成績ヲ見タリ  
 ケレハ其ノ原因ニ就キ種々研究ヲ重ネタル結果蠶室  
 ノ構造ト調温ノ如何トニ關係スルモノ多キヲ觀破シ  
 爾來愈々之レヲ研究ニ意ヲ注キタリ尋テ慶應三年三  
 月兒玉郡青柳村大字新宿木村勝五郎ノ遺跡ヲ繼キ專  
 ヲ斯業ノ改良ヲ計リ博ク諸種ノ著書ニ稽ハ信州及西  
 野ハ勿論遠ク東北諸縣ニ至ルマテ歴遊シテ古先ヲ訪  
 々其所説ニ鑑ミ實地ニ其利害得失ヲ講究シテ遂ニ蠶



室ノ方向ヲ一定シ調温ニ火氣ヲ補給シ蠶見ノ食慾ヲ  
振興セシムル等普通ノ温暖育トハ其趣ヲ異ニスル養  
蠶法ヲ發明シ名ツケテ一派温暖育法ト稱シ明治五年  
之ヲ發表スルニ至レリ然レトモ頑固ニシテ舊習ヲ墨  
守スルモノニアリテハ其養法ヲ見テ頗ル危険ノ法ナ  
リトシ木村ノ熱リ飼ト稱シテ之ヲ冷評シ嘲嗤指彈ス  
ルモノ多シ九藏毫モ意ニ留メス愈々其育法ヲ確守シ  
テ止マサルノミナラス進ンテ其普及ヲ計レリ故ニ其  
法ニ倣ラントスルモノアレハ其ノ家ニ臨ミテ懇切指  
導シタルニ其ノ蠶家ニアリテハ未嘗有、豊作ヲ告ケ  
棄死ノ厄ニ陥ル事ナシ故ニ其ノ教ニ洽セルモノ九藏  
ヲ尊重シテ宛然神ノ如ク遂ニ九藏ノ名ヲ呼フモノナ  
ク寄島ノ衣笠神ト尊稱スルニ至レリ然レトモ後来地

埼玉縣

方ノ養蠶家ハ其豊凶常ナラサルヲ天運ニ歸シ人為ヲ  
以テ如何トモスル能ハサルモノト誤認スルモノ多カ  
リシカ故ニ其養法ヲ深ク解セサルモノハ頗ル怪訝ノ  
念ヲ懷キ終ニ九藏ハ魔術ヲ用ヒテ養蠶ヲナスト稱ス  
ルニ至リ其異稱近郷ニ喧レ當時大里郡荒川ノ沿岸ナ  
ル一村落ニ於テ九藏ノ養蠶講話ヲ望ムモノアリ請ヲ  
容レ其ノ村ニ至リシニ九藏ノ育法ヲ非難スルモノハ  
魔術師村内ニ入ラハ必然自家ノ養蠶ニ案アリト稱シ  
テ軒頭七五三繩ヲ張り門前塩ヲ撒キタルモノアルニ  
至リシト云フ而シテ當日九藏自ら發明製作ニ係ル蠶  
種催青器(周圍ヲ紙ニテ貼リ行燈ノ形ヲ為セリ)ヲ携ハ  
テ會場ニ臨ミシニ聽衆未タ催青器ノ何物タルヲ知ラ  
ズ之ヲ見テ以テ魔神ヲ納メタルモノトナシ附會ノ説



場、内外ニ傳播シ會場騷然遂ニ穀砲シテ之ヲ劫スモ  
ノアルニ至リシモ九藏自若トシテ講話ヲ繼續シ進テ  
催青器ヲ取り出し懇切丁寧其構造ト之カ効用ヲ説示  
シ漸ニシテ了得セシメタリト云フ養蠶ノ未タ幼稚ナ  
ル時ニ方リ嶄新ノ改良法ヲ普及セシメントスルノ困  
難ハ以テ奉スルニ餘アリ

一、蠶種催青器案出

温暖育、發明ニ伴ヒ催青器ヲ案出し能ク催青ヲ媒助  
シテ蠶蠶ノ發生ヲ安全ナラシメ尚此器ヲ以テ蠶種貯  
藏用ニモ通セシム此器一度世ニ出テシヨリ養蠶器具  
中重要、モノトシテ現今廣ク養蠶家ノ用ユルモノト  
ナレリ

一、桑樹撰定及桑苗頒與

埼玉縣

養蠶ノ豊凶ハ飼育ニアリト雖モ桑ノ良否又至大ノ關  
係アルヲ以テ明治五年桑樹ヲ試植シテ其良否ヲ鑑別  
シ就中早生種多胡中生種李次郎晚生種八日市、他ニ  
比シ最モ適當ナルコトヲ確認シ其苗亦ヲ仕立テ之ヲ  
同業者ニ頒與シ育養上ノ便益ヲ計レリ

一、競進組團結

明治五年改良養法、一機軸ヲ出シ兩速專ラ之カ普及  
ニ努メタル結果其門ニ入り斯業ノ傳習ヲ望ムモノノ歳  
ヲ追テ増加シ特ニ木村豊太郎浦部良太郎、如キ熱心  
教ヲ受ケ大ニ其ノ技術秀スルヲ以テ茲ニ自己ノ計劃  
ニ成レル方法ヲ語り相謀リテ養蠶改良競進組ヲ團結  
ス時ニ明治十年四月ナリキ而シテ其ノ目的タル當時  
猶幼稚ナル養蠶家ヲ導キテ組員タラシメ自ラ組長ト



ナリ浦部、本村ヲ副組長トナシ組員ニハ備サニ養蠶法ヲ授ケ安全ニ好果ヲ奏セシメ改良法ノ普及ヲ謀リ其指導懇切周到ナリシカハ組員皆豊作ヲ見ルニ及ヒ遂ニ相競ヒテ加盟スルニ至リ隨テ巡回教授ノ個所俄然四方ニ擴マリ為メニ門下熟練ノ輩ヲ派遣シテ已ニ代リテ教授セシム後テ教授員ト稱スルモノ爾後年々増加スルニ至ル依テ更ニ斯業奨勵ノ目的ヲ以テ組員ノ收繭ヲ蒐集シ之レカ品評會ヲ自邸ニ開キ其優者ヲ審判シテ得失ヲ講シ優者ヲ賞シ劣者ヲ勵マシ而カモ之ニ要スル一切ノ費用ハ概テ之ヲ自辦セリ

一、桑篩案出

明治十一年桑篩ヲ案出ス元來推蠶ノ給桑ニ際シ細刈セル桑葉ヲ施スニ手掌ノ傷ニ依テ足ヲ行ハハ自然斑掛トナルノ不利アルヲ以テ苦辛ノ末之ヲ考案シ明治九年以來試作數十回茲ニ至リ始メテ満足ノモノヲ得タリ該篩ハ皆六角目一分五厘ニ始マリ六分ニ終ル對桑ヲ給スル意、如クニシテ頗ル便利ナリ是ヲ以テ地方養蠶家ニシテ該器ヲ使用セサルモノ無キニ至レリ

一、白玉新撰種撰出

又夙ニ本邦蠶種ノ頗ル雜駁ヲ極メ玉石混淆シテ當業者殆ント五里霧中ニ彷徨シ良種ヲ撰定ニ苦ムヲ憂ヒ連年原繭ヲ撰抜シテ其良否ヲ試シ之カ撰出ニ苦心セリ偶々明治十二年神奈川縣主催縣令共進會ノ審査員ニ選マレシヲ好期トシテ來會ノ有志ト意見ヲ交ハ蠶絲改良ノ策ハ主トシテ蠶種製造家ニシテ製絲ニ適スル良種ヲ飼育シ汎ク之ヲ養蠶家ニ頒ツニアラハ



製絲家カ如何ニ技術ノ蘊奥ヲ極ムルモ到底佳良ノ生  
絲ヲ出スコトヲ得ヘカラサルヲ感シ自ラ良種ノ撰出  
ヲ期シ身ヲ挺シテ此一大難局ニ當ルノ決心ヲナセリ  
而シテ良種ノ撰定ハ養蠶家ニアラスシテ經驗アル製  
絲家ニ就テ探究スルニ如カストシ研究ヲ此方面ニ及  
ホシ同十三年遂ニ飼育容易ニシテ收穫多ク絲質マタ  
善良ナル一種類ヲ撰出シ名ケテ白玉新撰ト稱シ之ヲ  
當業者ニ頒テ飼育セシメタルニ皆好果ヲ奏セサルナ  
シ爾來各地ニ普及シテ複製頻リニ興リ現今種ヲ飼育  
スル者全國各府縣ニ互リ且本縣ニ於ケル飼育高ハ其  
全數量ノ半以上ニ達セリ

一、競進社創立及傳習所設置  
競進組ノ事業駛トレテ其ノ歩ヲ進メ名聲四方ニ轟

埼玉縣

クニ至リ其ノ組員トナルモノ次第ニ増加シ養法ノ傳  
習ヲ乞フモノ愈々多シ茲ニ於テ其ノ規模ヲ宏大ニシ  
組織ヲ鞏固ナラシムルノ必要ヲ認メ明治十七年十月  
養蠶改良競進社設立ノ事ヲ出願シ同年十一月許可ヲ  
得本社ヲ新宿村ナル自邸ニ置キ出張所ヲ児玉町ニ設  
ク推サレテ社長トナリ養蠶傳習所ヲ児玉町ニ新設セ  
シカ居村ヲ距ルコト二里ニシテ頻々往復ノ勞吝ナラ  
スト雖モ其ノ事務所及傳習所ヲ此地ニ設ケタルハ  
蓋シ自己ノ便吾ヲ顧ミルノ違アラスシテ専ラ事業ノ  
進興ヲ期スルニアリ此地ハ古來養蠶製絲ヲ以テ業ト  
シ千戸ノ炊煙蠶絲ニ賑ヒ交通運輸ノ便アルニ依ルモ  
ノニシテ内ハ専ラ實業生徒ヲ養成シ外ハ勉メテ改良  
養法ノ普及ヲ謀リ以テ蠶業ノ進運ニ裨益セン事ヲ期



セシニ外ナラス此月傳習所開業式ヲ舉ケルト同時ニ  
第二回蘭ノ品評會ヲ見玉所ニ開設ス其盛況亦第一回  
ニ勝ルコト數等翌十八年ニ至リ志願者ノ入場ヲ許シ  
多年ノ實績ニ鑑ミ新築シタル模範養蠶室ニ於テ業ヲ  
授ケ頗ル好成績ヲ得タリ之レヨリ傳習所ノ程度漸ク  
整備ノ域ニ達シ愈發展ニ向ヘリ

一、伊佛蠶絲視察

明治二十二年三月蠶絲業視察ノ為メ伊佛兩國ニ渡航  
シ大ニ研究スル所アリ就中飼蠶ノ法撰種ノ術護種ノ  
制等ニ就テハ特ニ細密ナル調査ヲ遂ケ留ルコト約五  
ヶ月ニシテ歸朝ス

一、蠶種貯藏庫創設

夙ニ本邦養蠶ノ掃立蠶種ニ對スル成繭ノ比例極メテ  
尠少ナルヲ憂ヒ之レカ救済ノ策ヲ講スルニ汲々タリ  
特ニ先年歐洲巡視ノ際伊太利パドワ蠶業講究所長博  
士ヴエルソン氏ニ就テ採究スル所ニ依ルモ蠶種ヲ護  
法ノ完否ハ大ニ成繭ニ關係スルモノアルヲ覺リ本邦  
未タ曾テ完全ナル蠶種貯藏庫ノ設ケナキヲ慨シ之レ  
カ設ケニ熱中シ漸ク有志ノ協力ヲ得テ之ヲ見玉郡本  
莊町ニ建築ス該貯藏庫ハ伊佛ニ於テ實見シタル方式  
ニ則リ彼我ノ地勢風土ヲ對照参酌シ之ニ自己ノ考案  
ヲ加ヘ工學博士辰野金吾氏ニ其設計ヲ託ス後其ノ竣  
工ニ及シテ更ニ之ニ附属スル第一第三期ノ取扱室ヲ  
増設シ翌二十五年ニ至リ周ノ富業者ノ委託ヲ受ケ安  
全ニ蠶種ノ保護ヲナスノ運ヒニ至レリ後改メテ之ヲ  
會社組織トナシ推サレテ社長トナル之レ本邦ニ於ケ



ル蠶種貯藏庫設立ノ矯矢ニシテ農商務省、特許ヲ得  
タリソノ構造極メテ緻密ニシテ成績頗ル良好ナルカ  
故ニ年々貯藏ヲ委託スルモ、頗ル多シ今、大日本蠶  
種貯藏株式會社ト稱シ其貯藏數毎年四万乃至五万ヲ  
算ス

以上ハ其大要ヲ叙述シタルモノニシテ此外共進會品  
評會ヲ開キタルコト數回ニシテ多額、自費ヲ投シ又  
模範蠶室ヲ建築シ或ハ模範桑園ヲ作りテ衆庶ニ示シ  
又ハ内國勸業博覽會、府縣聯合共進會等ニ有益ナル考  
考品及自製、蠶繭蠶種ヲ出品ニシテ名譽大賞其他賞ヲ  
得タルコト枚舉ニ遑アラズ

一、勅定、緑綬褒章ヲ授受  
明治二十七年一月多年蠶業貢獻ノ功ヲ賞シ賜フニ緑

埼玉縣

綬褒章ヲ以テセラル

九藏、晩年

明治二十八年第四回内國勸業博覽會審査官ヲ命セラ  
レシモ病、為メニ之ヲ辞セリ醫師、診断ニヨレハ症  
狀輕カラサルヲ以テ上京シテ北里病院ニ入ル遠近傳  
ハ聞キテ病床ニ訪フモノ頗ル多シ然シテ談蠶業ノ事  
ニ及ハハ病ヲ忘レ諒ニ説テ倦マス焉メニ喉頭血ヲ流  
スニ至ル其、病軀ニ害アルノ故ヲ以テ屢醫看護婦ノ  
注意ヲ受タルコト日ニ幾回ナリシヲ知ラス三十一年  
一月病稍癒ハ自家ニ歸リ專ラ攝生ニ勉ム其、年蠶期  
ニ入ルヤ懇切生徒教養ノ事ヲ執リシカ病病又革マリ  
臥蓐ニマリテ猶能ク内外蠶事指導ヲ為シ且ツ枕頭ニ  
蠶架ヲ設ケシメ試験蠶ヲ移シ日夜手ツカラ育養、勞



ヲ執レリ當時病室ヲ訪フ者其状ヲ見テ感泣セサルハ  
 ナシ而シテ自ら其壽ノ久シカラサルヲ期シ後事ヲ奉  
 ケテ之ヲ副社長ニ託シ子弟ヲ枕頭ニ侍ラシメ蠶種保  
 護及養蠶準備ニ関スル事ノ外更ニ痛苦ヲ口ニセサリ  
 シト如斯ニシテ九藏カ兄長五郎ト唇齒ノ關係ヲ以テ  
 并ヒ互々畢生蠶業ノ振興ニ力ヲ竭シ國富ノ開發ニ貢  
 献シタル我蠶業史上没スヘカラサルノ功勞ニシテ殊  
 ニ関東地方ニ於ケル蠶業ノ發達ハ九藏兄弟ノ力ニ依  
 ルト云フモ敢テ誇大ノ言ニアラスナルヘク其餘力ハ遠  
 ク九州及東北地方ニマテ及ビ而カモ其實力ニ至テハ  
 寧ロ兄ヲ凌駕セリト云フ故ヲ以テ後進深ク之ヲ仰慕  
 シ其業績ヲ不朽ニ傳ヘン事ヲ企圖セシニ遠近相傳ヘ  
 テ資ヲ寄スル者頗ル多ク忽ニシテ二万圓ノ巨額ニ達  
 セリ即チ同三十三年十月伊藤侯ノ募額ヲ得テ一大功  
 徳碑ヲ官幣中社金鑽神社ノ邊リニ建設シ併テ記念蘭  
 蠶種品評會ヲ兎玉町ニ開催セリ以テ其功績ノ顯著ニ  
 シテ其感化ノ偉大ナルヲ知ルニ足ル

一、競進社、現況

九藏歿スルヤ副社長浦部良太郎社長トナリ其遺業ヲ  
 継承シ明治三十三年ニ至リ其ノ組織ヲ革メ競進社蠶  
 業學校トナシ文部大臣ノ認可ヲ得テ生徒ノ養成ニ努  
 メ各地ニ養蠶傳習所支部ヲ設ケタルモノ二十四ヶ所  
 本社ノ養蠶法ニ倣ヒ社員トナリシモノ叁万七千有餘  
 名ニ達シ直接生徒ヲ養成シタルモノ六千餘名ニ達ス  
 而シテ其社員ノ育法ヲ模倣シテ改良セルモノニ至テ  
 ハ實ニ其數幾万ナルヲ知ラス又直接生徒ヲ養成シタ



ルモノ六千餘名ニ達ス而シテ其社員ノ育法ヲ模倣シ  
テ改良セルモノニ至テハ實ニ其數數万ナルヲ知ラス  
又直接生徒ヲ養成シタル者六千ヲ超ヘ年々教授員ヲ  
派シテ養蠶改良ノ指導ヲ為スモノ三百名乃至四百名  
ニ達ス

埼玉縣



競進社長木村九藏碑 從一位大勳位侯爵伊藤博文篆額  
君諱徒連稱九藏幼名巳之助本姓高山氏遠祖遠江守滿  
重居上野綠野郡高山城子孫世位高山村為豪右十四世  
曰寅藏君其第五子也出承木村氏木村氏系出自坂上田  
村麻呂居近江木村鄉因為氏次郎五郎是初者避亂徙武  
藏兒玉郡新宿村拓荒蕪殖產業其裔曰彌次右衛門曰勝  
五郎彌次右衛門為本宗勝五郎歿嗣絕彌次右衛門以君  
承祀以次女君少從事蠶業嘗為其兄長五郎養蠶連歲不  
育因發憤歷遊奧信上武諸州就蠶戶質其法問父先舊傳  
採古書遺說熟察精究有年養蠶尤患乎寒溫驟變君欲用  
火定其度刻苦攷索至明治五年而成曰一派溫暖育歷徵  
有驗問業者漸多因分遣習熟其技者以傳之浦部良太郎  
木村豐太郎為門下尤君與二人謀糾同志益修其法名曰

養蠶改良競進組時會眾蒐集所製繭綿評隲品質講究得  
失稱品評會蠶種有白玉者世以為最良君所選也於是業  
滋廣名隨興更曰競進社廓規模定程則眾推君為社長浦  
部木村為副社長置本社郎中設養蠶傳習所兒玉郡兒玉  
町廣養生員二十二年三月官命遣視伊佛二國蠶事至十  
月歸明年官設第三回內國勸業博覽會奉為審查官競進  
社蠶種及繭得進步一等賞牌君所製亦受有劾一等賞二  
十八年第四回博覽會贈名譽賞牌以賞其養蠶方案君常  
謂蠶種難斷藏由庫制不完既歷覽伊佛大有所得遂募集  
合資造蠶種貯藏庫於本莊町託工學博士監營作折衷二  
國之制卷以已意匠精巧完備實踰舊制受官特許證又以  
養蠶宜原學術置蠶業講究所養生員理實相徵期完成其  
他或製催青器及桑篩或擇桑苗頒眾開品評會前後五次



共進會三次皆私費辦之生員成業者二千餘人為教員三百人海內蠶戶爭用君法殆至二万家清韓二邦人亦有求乞教者遠邇傳聞凡事開蠶業者皆託君以審查朝廷表章賜綠綬褒章三十一年一月競進社頌君功德贈金製香盃是月二十九日病歿年五十四聞者莫不惋惜葬新宿先塋之次會葬者無慮壹萬人明年十一月官追賞其功績賜褒狀及金若干二子長貞藏次理作天貞藏嗣家繼業襲稱九藏今者社員胥議請全文勒于石因揚狀撫要且銘之曰  
蠶桑之業求有自太奏賜姓皇寵異柔軟通膚質精緻絲綿如岳紛委積誰究原委纂遐懿鑽研多年覃心思器製溫暖補候季康設貯藏出新意授徒傳業提撕至惟圖世益不謀利挾續衣帛是誰賜善行升徹九重閱藍綬若若功名遂

明治三十二年四月

埼玉縣

文科大學教授正四位勳四等文學博士重野安繹撰

正四位勳三等

巖谷修書



明治十八年四月東京上野公園五品共進會出品第三等賞銀盃ヲ賜ハル同年六月同會ヨリ功勞賞金叁拾圓ヲ賜ヘリ其證書寫テ、如シ

功勞賞授與證

埼玉縣武藏國兒玉郡新宿村

一金叁拾圓

木村 九 藏

養蠶改良ヲ圖ラシカ爲メ夙ニ組合ヲ設ケ年々品評會ヲ開キテ其得失ヲ講究シ又養法ノ傳習ヲ乞フモノアリハ組中ノ熟練者ヲ派遣シテ叮嚀ニ之ヲ導キ其鴻益隣縣ニ及ヘリ今ヤ同盟幾ント八百名ノ多キニ至ル而シテ尙小成ニ安シヤス更ニ該傳習所ヲ建設シテ益々改良ノ遠圖ヲナス其功大ナリ由テ之ヲ賞ス

明治十八年六月五日

農商務卿後三位勲一等伯爵西郷從道

明治二十七年一月緑綬褒章ヲ賜ハル即チテ、如シ

埼玉縣兒玉郡青柳村大字新宿

木村 九 藏

夙ニ志ヲ農桑ニ勵マシカヲ養蠶ニ竭クシ刻苦多年遂ニ一派ノ温暖育法ヲ案出し催青器及桑篩ヲ新造シ桑苗ヲ擇ンテ同業者ニ頒與シ良爾ヲ簡選シテ蠶種ヲ精製シ名聲藉甚遠近來テ教ヲ乞フモノ多シ之レニ於テ競進社ヲ創立シ推サレテ社長トナリ廣ク生徒ニ傳習シ屢々品評會共進會ヲ開キテ私資ヲ投シ優等者ヲ賞シ其後海外ニ渡航シテ蠶業ヲ視察シ歸朝後蠶種貯藏庫ヲ設立シ以テ其得ル所ヲ實施シ孜孜トシテ改良ヲ



企圖スル等洵ニ實業ニ精勵シ衆庶ノ模範トス仍テ明治於四年拾貳月七日勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其善行ヲ表彰ス

明治二十七年一月二十六日

明治三十二年十月東京府下八王子町ニ於テ開催セラレタル一府九縣聯合共進會ニ於テ農商務大臣ヨリ追賞セラルル即チ其諡左ノ如シ

追賞授與諡

埼玉縣兒玉郡青柳村

一金拾五圓

夙ニ身ヲ蠶業ニ委ネ同志ヲ糾合シテ競進社ヲ組織シ以テ蠶種、改良ヲ企圖シ又錢多ノ子弟ヲ集メ之レヲ

薰陶シテ有為ノ蠶業家ヲ養成シ爲メニ斯業ノ發達ヲ致ス其遺績永ノ芳シ

右審査長、薦告ヲ領シ八王子ニ於テ之ヲ授與ス

明治三十二年十一月十五日

農商務大臣正三位勳二等曾根荒助

明治三十六年第五回内國勸業博覽會ノ開設アルヤ競進社ハ曩ニ木村九藏ノ制定セシ競進社養蠶改良方法ヲ出品シテ名譽金牌ヲ受領セリ左ノ如シ

第五回内國勸業博覽會褒賞諡

埼玉縣兒玉郡兒玉町

養蠶改良方策

競進社

夙ニ養蠶ノ改良ヲ唱導シテ後進ヲ誘掖シ之カ良法ヲ



授クルコト茲ニ卷拾餘年現ニ其法ニ倣ヘルモノ貳萬  
壹千餘人ニシテ殆ント海内ニ遍ク更ニ清韓兩國ノ各  
地ニ波及スルニ至ル又今回出陳スル所ノ蠶卵及ヒ爾  
共ニ品質極メテ精良ニシテ他産ニ卓絶セリ洵ニ斯業  
ノ水鐸ニシテ其功績甚偉ナリ

審査官 後七位 有働良夫

審査官 後六位 月田藤三郎

審査官 正六位 松永伍作

審査官 正六位 本多岩次郎

審査官 後五位勲五等  
農學博士 酒勺常明

審査部長 後三位勲二等 田中芳男

審査總長 正三位勲一等男爵 大島圭介

審査ノ成績ニ依リ前記ノ賞牌ヲ授與ス

埼玉縣

明治三十六年七月一日

第五回内國勸業博覽會總裁大勲位功四級載仁親王

明治四十四年参月大日本蠶絲會ヨリ金賞牌ヲ追賞セ  
ラル左ノ如シ

賞状

埼玉縣兒玉郡青柳村

故 木村 九藏

夙ニ蠶業ノ改良ニ志シ刻苦淬勵シテ養蠶法ノ得失ヲ  
講究セシコト多年竟ニ一種ノ温暖育法ヲ案出スルヤ  
名聲籍甚其教ヲ乞フ者其門ニ蟬集ス明治拾年競進組  
ヲ興シ其長トナリ或ハ品評會ヲ開キ或ハ教師ヲ派シ  
テ實地ニ指導シ或ハ蠶種催青器桑節等ヲ新案シ或ハ



桑樹ノ良種ヲ撰擇シ蠶種ヲ精撰シ曾テ舊套ニ安ンセ  
ス明治拾七年更ニ競進社ヲ創設シ推サレテ社長トナ  
リ益生徒ノ教養ニ力ム後官命ヲ帶ヒテ歐洲ノ蠶業ヲ  
視察シ得ル所少カラス歸來蠶種貯藏庫ヲ新設シテ富  
業家ノ便益ヲ圖ル等畢生汲々トシテ専ラ斯業發達ニ  
努メ後進ヲ誘掖シ以テ克ク同社今日ノ隆盛ヲ致ス其  
勞効洵ニ著大ナリトス仍テ本會功績表彰規則ニ據リ  
茲ニ金賞牌ヲ追贈シテ其功績ヲ表彰ス

明治四十四年三月二十五日

大日本蠶絲會總裁大勲位功二級貞愛親王